

スペイン語の子音音素 /b/, /d/, /g/, /y/, /w/ の異音について

木村 琢也

要旨

スペイン語の音素 /b/, /d/, /g/ の非閉鎖音異音は伝統的に有声摩擦音であると説明されてきたが、現在では接近音であると記述されている。自然な発話で実際に有声摩擦音を発するのは難しく、それらは調音位置を同じくする接近音に容易に取って代わられる。これら 3 つの音素は、/y/, /w/ と同じく、調音位置を同じくする閉鎖音から半母音までの広範な子音をその異音として認める。この事実から、これら 5 つの音素はスペイン語の子音音素体系の中で「有声閉鎖音」と呼ぶうる単一の音韻的な類を構成すると考えてよい。

Sobre los alófonos de los fonemas consonánticos españoles /b/, /d/, /g/, /y/ y /w/

Takuya KIMURA

Resumen

Los alófonos no oclusivos de los fonemas españoles /b/, /d/ y /g/ actualmente se describen como aproximantes, aunque tradicionalmente se explicaba y se creía que eran fricativas sonoras. De hecho, las fricativas sonoras son difíciles de producir en el habla espontánea y pueden ser fácilmente sustituidas por una aproximante homorgánica. Estos tres fonemas, al igual que /y/ y /w/, admiten como alófonos una amplia variedad de consonantes homorgánicas, desde una plosiva hasta una semivocal. Este hecho justifica que se considere que los cinco fonemas constituyen una única clase fonológica, que puede etiquetarse como "oclusivas sonoras" en el sistema fonémico de las consonantes del español.

1. /b/, /d/, /g/ の異音に関する記述

スペイン語の音素 /b/, /d/, /g/ にはそれぞれ二種類の調音様式の異なる異音があるとされている。原 (1979) は入門書としては異例なほど発音に関する記述が詳細な本であるが、同書の綴り字の読み方の解説の中で、b については「休止および m のあとにおいてのみ破裂音 [b] が現われ、それ以外のすべての位置では摩擦音 [β] が現れる (p. 18)」、d については「休止および n, l のあとにおいてのみ破裂音 [d] が現われ、それ以外のすべての位置で

は摩擦音 [ð]⁽¹⁾ が現れる (p. 19)」、g については「休止および n のあとでのみ破裂音 [g] が現われ、それ以外のすべての位置で摩擦音 [ɣ] が現れる (*ibid.*)」と説明されている。つまり、これらの音素は直前の音環境によって破裂音（以下では「閉鎖音」と呼ぶ）と摩擦音の異音が相補分布を成しているということである。

このように、スペイン語の /b/, /d/, /g/ の非閉鎖音異音は、伝統的には摩擦音と説明されてきたが、今世紀になって多くの著作で接近音であると主張されるようになってきている。

1.1 摩擦音説

Navarro Tomás (1918) によると、閉鎖音が現れない環境の b は有声両唇摩擦音 (bilabial fricativa sonora)⁽²⁾ で、唇が半開きになる (pp. 84-85)。d は有声歯・歯間摩擦音 (dentointerdental fricativa sonora) であり「舌先が上前歯のふちに軽く触れ、空気の流出が完全には止められない。舌が歯に触れる動きは鋭く速く、接触は短く、空気の摩擦は軽微で静寂である (p. 99)」。g は有声軟口蓋摩擦音 (velar fricativa sonora) で、呼吸は後舌と軟口蓋の接近による間隙を通る際に軽微な摩擦を産出する (p. 139)。

RAE (1973) も同様にそれぞれの異音を [β] 有声両唇摩擦音、[ð] 有声舌尖・歯・歯間摩擦音 (apicodentointerdental fricativa sonora)、[ɣ] 有声後舌・軟口蓋摩擦音 (postdorsovelar fricativa sonora) と紹介している (pp. 20-22)。

Quilis (1981: 221-228) は音響的観点から音声を分類しているが、boba, veda, vega, saya の下線部に現われる [β, ð, ɣ, j] を低共鳴摩擦音 (fricativas de resonancias bajas) と呼び、高共鳴摩擦音 (fricativas de resonancias altas) [f, θ, s, x] と対比している。

1.2 接近音説

Martínez-Celdrán (2008: 34) によると、これらの音を初めて接近音と呼んだのは Martínez Celdrán (1984) である。同書では [p, t, k, f, θ, s, x, t̪] を緊張性子音 (consonantes tensas) と呼び (p. 309)、弛緩性子音 (consonantes flojas o laxas) と対比させた上で、後者を閉鎖音 (oclusivas) [b, d, g, ɟ] と接近音 (aproximantes) [β, ð, ɣ, ɣ̞, ɣ̠] と破擦音 (africada) [d̪t̪] に下位分類している (p. 330)。

Martínez-Celdrán *et al.* (2003) でも問題の子音は接近音 (E. approximant) [β, ð, ɣ]⁽³⁾ であると述べられている。そして「簡略表記では補助記号を省いて構わない。これらの子音は摩擦音としては存在しないからである」という表現で、摩擦音説を明確に否定している (p. 258)。

Martínez-Celdrán (2008) は摩擦音説への批判をさらに強め「いわゆる有声摩擦音 (E. so-called voiced fricatives)」を「キメラ (E. chimera)」と呼ぶに至っている (p. 32)。そしてこれらの音を E. spirant approximants という用語で呼んでいる (*ibid.*)。

E. Spirant は通常 E. fricative の同義語として用いられるが、Martínez-Celdrán (2008) によ

ると、伝統的に E. fricative という範疇は、閉鎖音以外の子音を何でも集めた寄せ集めの類 (E. a hodgepodge class) である。ここで問題にしているスペイン語の子音は摩擦音特有の摩擦噪音を持たないし、摩擦音よりも有意に短い。これらを spirant と呼ぶのは、同じく接近音である半母音 (E. semi-vowels)、流音 (E. liquids)、R 音 (E. rhotics) から区別するためである (p. 36)。

ここで Martínez-Celdrán は Martinet (1956) を引用している。Martinet はスペイン語の ocupado の d のような音を F. spirantes と呼び、英語の father の th のような F. fricatives と異なり摩擦噪音 (F. frottement) を持たないと述べている (pp. 24-25)。Martínez-Celdrán は、自分はこの Martinet の分類に従っていると主張する。

Martínez Celdrán y Fernández Planas (2013: 53-63) もこれに倣い aproximantes espirantes という用語を用いている。彼らによるとスペイン語には両唇接近音 [β], 歯間接近音 [ð], 軟口蓋接近音 [ɣ], さらに硬口蓋接近音 [j] と硬口蓋二重調音 (articulación doble palatal) [jj] がある。このうち [j] と [jj] はいずれも /y/ の異音であるが、Martínez Celdrán (2014) は、[jj] は閉鎖音に「全く摩擦のない接近音 (aproximante sin ninguna fricación)」が続いたものであり、したがって破擦音 (africada) ではなく、これを二重調音 (doble articulación) と呼ぶと述べている。

RAE y ASALE (2011) もこれらの音に [β, ð, ɣ] を使い、初出時 (p. 122) には「接近継続音 (continuos aproximantes)」, それ以外の箇所では単に接近音 (aproximantes) と呼んでいる。

Hualde (2005) はこれらの音に [β, ð, ɣ] の記号を使っているものの、これらを接近音 (E. approximant) と呼び、「狭窄の程度はきわめて多様である」と説明している (pp. 64-66)。

1.3 「接近音」の概念

以上、ここで問題にしているスペイン語の /b/, /d/, /g/ の非閉鎖音的異音が、おおまかに言って 20 世紀のあいだは摩擦音、21 世紀になってからは接近音と記述されていることを確認した。これだけを見ると、可能性として ①実際の発音が時代と共に摩擦音から接近音に変化した、②実際の発音は変化していないが、観察の精度が向上して実は摩擦音でなく接近音であることが発見された、といったことが考えられるが、ことはそれほど単純ではない。

そもそも接近音という概念はそれほど古いものではない。Catford (1977: 122) によると、approximant という用語の初出は Ladefoged (1964: 25) で、そこでは「音声的には母音類 (E. vocoid) すなわち中線の共鳴的口音 (E. central resonant oral) に属し、同時に音韻的に子音に属する音」とされていた。Ladefoged (1971: 46) ではその定義が改定されて「乱気流を産出しない二つの調音器官の接近」となっている。Catford によると、Ladefoged はこの時点で暗黙裡に「中線的」という条件を外し、[l] なども接近音に含めた。Catford はさらに続けて、自身の考える接近音について次のように述べている。「私たちの接近音の定

義が Ladefoged の改定後のものと異なるのは、調音通路面積 (E. the area of the articulatory channel) の下限だけでなく上限も含んでいるという点のみである。すなわち、接近音は有声のときだけ非乱流的気流 (E. non-turbulent air-flow) を持つということである⁽⁴⁾。これによって、私たちはこの接近音の範疇から [ɛ, a] のような広く開いた前舌母音を除外することができる。それらは狭窄の次の種類に含まれる。(p. 122)」ここで「狭窄の次の種類」というのは共鳴音 (E. resonant) を指し、これは調音通路面積が十分に広いため無声でも有声でも非乱流的気流になる音である。

IPA の記号表に初めて approximant という用語が現れるのは、1979 年版 (IPA, 1978) においてである。それ以前の版、例えば 1951 年版⁽⁵⁾ では「無摩擦継続音と半母音 (E. frictionless continuants and semi-vowels)」の名のもとに [w], [ɥ], [ʋ], [ɹ], [j], [ɰ] がまとめられている (このうち [ɰ] は「摩擦音 (E. fricatives)」の行にも現れている)。

では、この「無摩擦継続音と半母音」が IPA 表に初めて現れたのはいつか。1928 年版である。この版の表はドイツ語で書かれており、「子音 (G. Konsonanten)」の中に、それまでなかった「半母音および無摩擦継続音 (G. Halbvokale u. reibungslose Dauerlaute)」という範疇が誕生している。ここに入れている [w], [ɥ], [ʋ], [ɹ], [j] といった音は、そのひとつ前の 1926 年版では E. semi-vowels と E. fricatives に分けられており、さらにひとつ前の 1921 年版ではすべてが F. fricatives に押し込められている。

1.1 で「摩擦音説」を唱えているとして紹介した Navarro Tomás (1918) が書かれた時代には、今日「接近音」と呼ばれている音はすべて摩擦音の範疇に入れられていたのだ。RAE (1973) と Quilis (1981) が書かれた時期にも未だ「接近音」という用語は普及しておらず、「無摩擦継続音」という概念はあったものの、/b/, /d/, /g/ の異音がそれだという発想に至ったのは (本人の言を信じるならば) Martínez Celdrán (1984) が最初だったということである。

1.4 有声摩擦音の困難さ

前節で引用したように、Catford (1977) は共鳴音を「調音通路面積が十分に広いため無声でも有声でも非乱流的気流になる音」と定義している。摩擦音はそれとは逆に「調音器官の近接が狭い通路を形成し、そこを気流が無理に通って行く過程で乱流となる音」であり (p. 117)、これは無声でも有声でも乱流となる。そして、両者の中間にあるのが「無声では乱流、有声では非乱流になる」接近音である。同書 p. 124 の Figure 27 に明らかなように、喉頭よりも上の調音位置での気流通路断面積が 40 mm^2 程度の場合、同じ始動力 (E. initiator power)⁽⁶⁾ で発せられた気流は無声では摩擦噪音を生じるが、有声では生じない⁽⁷⁾。

実際、試みに有声唇歯音の接近音と摩擦音を交互に [ʋ::v::ʋ::v::] と発音してみると、接近音よりも摩擦音のほうが大きな発音努力が求められる。軟口蓋音で [ɣ::y::ɣ::y::] とやってみても同じである。そして、両唇音 [β::β::β::β::] と歯音 [ð::ð::ð::ð::] については、接近音と明確に区別できるほどの摩擦音を発音することにはかなりの困難を感じる。

Martínez-Celdrán et al. (2003) のように [β, ð, ɣ] が「摩擦音としては存在しない」というのは大げさだとしても、スペイン語の通常の発音で /b/, /d/, /g/ が明確な有声摩擦音で実現されることは、かつて信じられていたよりも稀だと考えるのが理にかなっている。

2. スペイン語母語話者による主観評価実験の結果の再検討

筆者は2014年11月10～21日にスペインのサラマンカ大学日西文化センターの普通教室で知覚実験を行なった。実験協力者は、スペインのスペイン語を母語とし、日本語の学習経験のない現地在住者50名（女性40名、男性10名。年齢18～76歳、平均29.7歳）である。

刺激音声として、発表者が Digo _____ después. 「私は後で _____ と言う。」というキャリア文の下線部に79種類の様々な音連続を入れて読んだものを用意した。これらの刺激音をスペイン人50名に聞かせて発音の良さを主観評価してもらった。このうち、/b/, /d/, /g/ に関する結果を Kimura (2018) に、/y/ に関する結果を Kimura & Arai (2019) に発表している。以下ではそれらの概要のみを簡略に記し、/b/, /d/, /g/ については新しい考察を加える。

2.1 /b/, /d/, /g/

ここで使用したターゲット語は cava /'kaba/ 「発泡酒」、cada /'kada/ 「それぞれの」、pago /'pago/ 「支払い」の3語で、刺激音には cava の ['kaba], ['kaβa], ['kaβa] の3種の発音、cada の ['kada], ['kaða], ['kaða] の3種の発音、pago の ['pago], ['paɣo], ['paɣo], ['paɣo] の4種の発音が含まれていた。

79試行を1セッションとし、1試行では同一刺激を2度連続してヘッドフォンを通して提示した。実験は2セッション実施し、それぞれ異なるランダムな順序で79刺激が提示された。実験協力者は刺激音声を聞き、そのつどターゲット語の発音を「1: 非常に悪い、または他の単語に聞こえる発音」から「5: 非常に良い、母語話者なみの発音」まで5段階の評点で評価することを求められた。分析に際しては同一刺激に対する2セッションの回答の合計点を評点とする。つまり最高が10点、最低が2点である。

分散分析の結果、cava, cada, pago のいずれにおいても母語話者の評点には調音様式の違いによる効果が見られた。また、pago 刺激群で /g/ を [ŋ] で発音したものに対する評価が極端に低かったのを除けば、いずれの刺激群でも評価の高い刺激から摩擦音>閉鎖音>接近音という順になった。最も高評価だったのは ['paɣo] の平均8.76点、['paɣo] を除き最も低評価だった ['paɣo] も平均6.34点を得た。

筆者の朗読音声刺激として使用されているため、問題の子音以外の部分が完全に等質であることが保証されておらず、それが評価に影響を与えている可能性は否定できないが、['paɣo] 以外のすべての刺激音が少なくとも一部の協力者から9点や10点という高い評価

を得ていることから、刺激音の質はある程度高かったと推測してよい。

以上が Kimura (2018) の概要だが、ここで生じる疑問は、なぜ摩擦音の評価が最も高く、接近音のほうが低いのかということである。1.4 で見たように現実のスペイン語で接近音が一般的であるならば、接近音刺激のほうが自然に聞こえたはずである。その原因の一端は筆者が準備した刺激音そのものにあった。

図 1～3 に実験に使用した刺激音声の波形とスペクトログラムを示す。音声分析と描画には Paul Boersma & David Weenink (1992) Praat, ver.6.1.16 を使用した。図 1 は cava、図 2 は cada、図 3 は pago の、それぞれ問題となっている子音とその前後の部分のみの音声である。各図の左側に摩擦音、右側に接近音を配した。

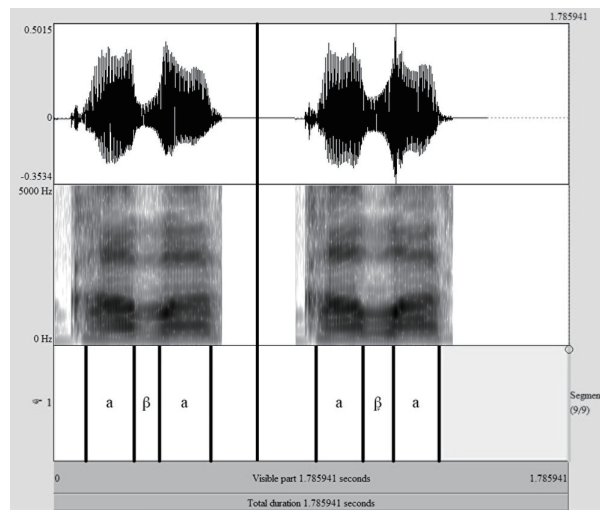


図 1. ['kaβa] (左) と ['kaβ.a] (右)

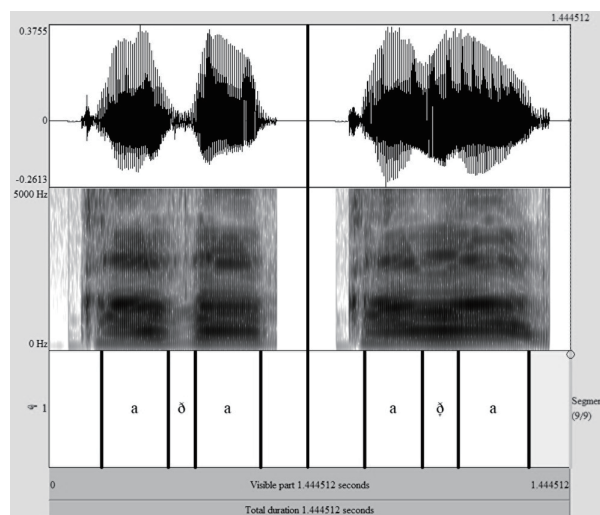


図 2. ['kaða] (左) と ['kaða] (右)

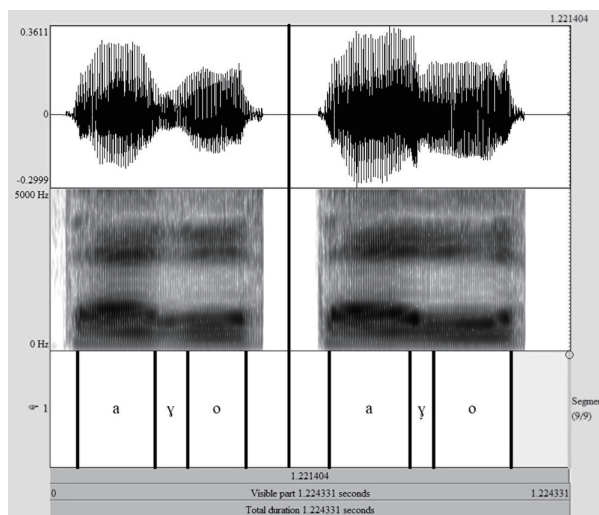


図 3. [ˈpayo] (左) と [ˈpayo] (右)

図からわかることは、各図の左側、すなわち有声摩擦音の摩擦噪音が極めて弱いということである。左右の主要な違いはむしろ、右側の接近音のほうが、より母音的でフォルマントが鮮明に見えるという点である。つまり、摩擦音と接近音のペアと言っても、摩擦音のほうはかなり接近音に近いものだったのである。摩擦音と接近音は定義上は明確に区別されているが、現実の音声では摩擦音の中に様々な狭窄の程度が可能であり、狭窄が広く摩擦が軽微なもの（接近音に近い）から狭窄が狭く摩擦が強いもの（閉鎖音に近い）まで、すべては定義上摩擦音になってしまう。筆者の実験では摩擦音としてそれぞれ 1 種類の音声しか使用しなかったが、仮に狭窄の程度の異なる摩擦音刺激を提示していたら実験協力者の反応も異なった可能性がある。今回使われた刺激は（意図したわけではなかったが）接近音に近い摩擦音と明確な接近音のペアであった。そして、実験協力者の耳には前者のほうが後者よりも「良い」発音に聞こえたということだ⁽⁸⁾。

2.2 /y/

前節で紹介したのと同じ実験において、/y/ の様々な異音の母語話者による主観評価も調べた。そのために使用したターゲット語は calle /ˈkaye/ 「街路」と lleno /ˈyeno/ 「満ちた」の 2 語である。刺激音声の中ではこれらの語中の /y/ の部分を [j], [y̞], [j̞], [j̠], [ɜ], [ɘ], [i] の 7 種の異なる音で発音した計 14 種類の録音を使用した。

詳細は Kimura & Arai (2019) に譲るが、calle 刺激群では [j], [y̞], [j̞] への評価が、lleno 刺激群では [j̞], [j̠] への評価が高く、語頭と語内で反応が異なることが示唆される。また、lleno 刺激群では calle 刺激群と異なり [y̞] への評価が低く、/y/ の直前の母音の影響が考えられる。そして、それぞれの刺激群において順位の低い刺激に対しても、9 点または 10 点という高評価を与えている協力者が存在した。これは硬口蓋音である限り様々な調音様

式の音が /y/ の異音として許容されることを示している。

3. /y/, /w/ のスペイン語子音音素体系内の位置づけ

今回 /w/ (正書法では hu と表記され、直後に母音が来ることが条件) については観察や実験をおこなっていないが、これが摩擦音に近い調音になり得ることは Navarro Tomás (1918) にも記述されているし (p. 63)、Quilis (1993) には hueso [gwéso], ese hueso [ese ywéso] といった発音が記録されている (p. 192)。このように多様な異音を持つ /y/, /w/ をスペイン語の子音体系の中にどのように位置づけるか、若干考察する。

3.1 Martinet

Martinet (1955) はスペイン語の子音音素を 5 つの系列、すなわち硬音 (F. fortes)、軟音 (F. douces)、摩擦音 (F. fricatives)、鼻音 (F. nasales)、側音 (F. latérales) に分け、硬音に p, t, ch, c (いずれも正書法的表記による) を、軟音に b, d, y, g, hu を属させている (p. 62)。つまり、/b/, /d/, /y/, /g/, /w/ を同一の系列と見ている。前節までの観察はこの Martinet の見解を支持するものである。

3.2 Hara

Hara (1973) は /j/ (本稿でいう /y/ のこと) は異音 [i, j, j̃, j̃̃] を、/w/ は異音 [u, w, w̃] を持つとし⁹⁾、やはり多様な異音を認めているが、これらを半母音 (semivocales) と呼んで (p. 193)、閉鎖音とは異なる系列と考えていることが窺える。

3.3 RAE y ASALE

RAE y ASALE (2011) の pp. 342-343 は周縁的母音 (または衛星母音) (vocal marginal (o satélite)) について述べ、これは半母音 (semivocal) と半子音 (semiconsonante) をまとめた上位概念であると定義している。

これらの分節音 (segmentos)¹⁰⁾ の音韻的性質については、次の①と②の立場の間で激しい論争がある。

① 母音とは異なる /j/, /w/ とする立場

② /i/, /u/ の異音であって弁別機能はないとする立場

①の支持者の論拠は、成節的母音と周縁的母音の間には、それらを 2 つの対立する分節音と見なすのに十分なほどの音声的差異があるというものであるが、②の支持者によると周縁的母音の性質は音節内の位置によって予知可能で、最小対もないため、同一の音素の異音と見てよいというものである。

RAE y ASALE (2011) によると最近②が優勢のようであるが、音声的実質を重視する

ならば、①のほうが妥当な考え方だと言える。

RAE y ASALE (2011) の pp. 299-300 には hielo と hueco の発音には語頭分節音の狭窄の弱いものから強いものまで順に次のようなバリエーションがあると述べられている。

[ˈi̯e.lo] > [ˈje.lo] > [ˈje.lo], [ˈʒe.lo] > [ˈdʒe.lo], [ˈd͡ʒe.lo]

[ˈue.ko] > [ˈwe.ko] > [ˈʷwe.ko] > [ˈg̞ue.ko]

これもまた /y/, /w/ が接近音、摩擦音、破擦音（または閉鎖音）のいずれをも異音として許すことを示している。上記の②の立場では、[ˈd͡ʒe.lo], [ˈg̞ue.ko] をそれぞれ /ˈie.lo/, /ˈue.ko/ の可能な実現と考えることになるし、音節区分に関する情報も音素レベルで必須になる。

4. 有声閉鎖音音素 /b/, /d/, /g/, /y/, /w/

現代スペイン語の子音体系の著しい特徴のひとつは、有声摩擦音系列が完全に欠落していることである。これは音声としての有声摩擦音が有声閉鎖音音素 /b/, /d/, /g/ の異音と見なされるからであるが、いわゆる半母音音素 /y/, /w/ が音節頭に位置した場合も閉鎖音、破擦音、摩擦音、接近音のすべての異音が許容される点で /b/, /d/, /g/ に類似している。このようにスペイン語の非鼻音・非側面音・有声子音音素 /b/, /d/, /g/, /y/, /w/ はその異音の範囲に関して互いに類似しており、前 3 者を有声閉鎖音音素と呼ぶならば、後 2 者も同じ呼称で呼ぶこともあながち無理ではない。

これら 5 音素を同一の系列に含める考えは Martinet (1955: 62) によってすでに示されている。それを表 1 に示す。原著では音素記号ではなく綴り字で表記されているが、ここでは音素記号に書き直した。音素記号としては、その音素の異音のうち IPA で最も簡潔に表記できるものの記号を採用した。ただし、その原則に従えば /j/ とすべき硬口蓋音音素については、本稿でこれまで用いてきた /y/ で記す。

表 1 Martinet (1955) によるスペイン語子音音素体系

	唇音	歯音	歯茎硬口蓋音	軟口蓋音	円唇軟口蓋音
硬音	/p/	/t/	/t͡ʃ/	/k/	
軟音	/b/	/d/	/y/	/g/	/w/
摩擦音	/f/	/θ/	/s/	/x/	
鼻音	/m/	/n/	/ɲ/		
流音		/l/	/ʎ/		

これをもとに、筆者が提案するスペイン語子音音素体系を表 2 に示す。Martinet との違いは 3 つある。第一に、硬音、軟音をそれぞれ無声閉鎖音（ただし /ɣ/ を含む）、有声閉鎖音と呼んでいる。このほうが、調音様式によって分類されている他の系列との整合性が確保されて望ましい。第二に、Martinet の表にはなぜかはじき音 /ɾ/ とふるえ音 /r/ が欠けているので、それを補った。そのために構造主義的な美しさは犠牲になっている。第三は軽微な点だが、/k/ の記号をカッコ内に入れた。これは現代スペイン語のほとんどの変種で /y/ と /k/ の対立がなくなり、/y/ に合流しているからである。なお、スペイン以外のスペイン語では /s/ と /θ/ の対立もなくなっているが、スペインの大部分の地域ではこの 2 音素は厳然と区別されるので、この表には別々の音素として載せた。

表 2 本稿が提案するスペイン語子音音素体系

	唇音	歯音	歯茎硬口蓋音	軟口蓋音	円唇軟口蓋音
無声閉鎖音	/p/	/t/	/t͡ʃ/	/k/	
有声閉鎖音	/b/	/d/	/y/	/g/	/w/
摩擦音	/f/	/θ/	/s/	/x/	
鼻音	/m/	/n/	/ɲ/		
側面接近音		/l/	(/ʎ/)		
はじき音			/ɾ/		
ふるえ音			/r/		

5. 結語

冒頭に述べたように、スペイン語の /b/, /d/, /g/ の非閉鎖音異音は伝統的に有声摩擦音とされてきたが、現在では接近音と記述されるのが普通であり、しかもそのほうが現実に近い。また、有声摩擦音の一般的、原理的な難しさもあって、Martínez-Celdrán *et al.* (2003), Hualde (2005) のように [β, ð, ɣ] を接近音の記号として用いる研究者もいる。これらの事実が日本ではあまり知られていないように思い⁽¹¹⁾、本稿を日本語で書くことに意味があると考えた。

謝辞

本研究のうち実験に関わる部分は、上智大学「人を対象とする研究」に関する倫理委員会の承認を受けた「日本語母語話者によるスペイン語音素 /y/ の知覚、および日本語や行・ジャ行子音の生成、日本人学習者によるスペイン語発音のスペイン語母語話者による評価」（研究責任者 荒井隆行、研究実施者 木村琢也）の成果の一部である。

本研究のうち実験に関わる部分は、清泉女子大学平成 26 年度在外特別研究費および国内特別研究費の助成を受けた。実験の実施にあたっては、サラマンカ大学日西文化センターの教職員の皆様、および実験に参加して下さったサラマンカ在住の皆様にご多大なるご協力をいただいた。

注

- (1) 原著では異なる記号が用いられているが、本稿では混乱を避けるため、適宜 International Phonetic Alphabet の最新版 (IPA, 2020) に書き換えて示す。また印刷の都合上、補助記号の位置が原著と異なる部分がある。ほかの文献からの引用も同様。
- (2) 用語は原語で、特に断らなければスペイン語、E. は英語、F. はフランス語、G. はドイツ語。
- (3) 有声軟口蓋接近音に [ɥ] を用いないことについては「[ɥ] は円唇の有無に関する情報を持たない。[ɥ] は張唇半母音に使われる記号なので使わない」と説明している (pp. 257-258)。
- (4) 原文には “the approximant has non-turbulent air-flow only when voiceless” とあるが³、この “voiceless” は明らかに “voiced” の誤り（または “non-turbulent” が “turbulent” の誤り）なので、そのように理解する。
- (5) 1951 年版、およびそれ以前の IPA は下記のウェブサイトにて参照可。
https://www.internationalphoneticassociation.org/IPAcharts/IPA_hist/IPA_hist_2018.html
- (6) Initiator power をここでは「始動力」と訳したが、力学的には力ではなく仕事率であり、単位はワット (W) である。圧力と体積速度の積に等しい (Catford 1977: 80-84)。
- (7) 現行の IPA 表の中で [ɱ] が “voiceless labial-velar fricative”、[w] が “voiced labial-velar approximant” と定義されていることにも、この事実の一端が見て取れる。
- (8) 同様に、接近音の中にも摩擦音に近いものから母音に近いものまで様々な段階のものがあり得る。さらに、今回の実験協力者はスペインのスペイン語の母語話者であることも念頭に置くべきである。アメリカ大陸のスペイン語話者の中には、語中で母音間の /b/, /d/, /g/ を非常に開いた接近音で発音する人たちがいるので、そういう人々を対象に同様の実験を行なえば、また異なる結果が得られる可能性がある。多様な狭窄の程度を持つ摩擦音と接近音に対する母語話者の評価、そしてスペイン語の異なる変種による評価の違いについて詳しく知るためには、より精密にコントロールされた刺激を用いた知覚実験を行う必要がある。
- (9) Hara によると [j] は有声硬口蓋摩擦音 (p. 21)、[w] は母音間、または休止の後で母音の前に現われる、通常よりも子音的な [w] を表す (p. 23, n. 2)。
- (10) RAE y ASALE (2011) は「音素 (fonema)」という用語を一切使わず、互いに対立する音的単位を segmento と呼んでいる。
- (11) たとえば、比較的最近の著作である寺崎 (2017: 45-48) および福嶋&ロメロ (2021: 16-20) でもこれらの異音は摩擦音と紹介されている。

参考文献

- Catford, J. C. (1977) *Fundamental Problems in Phonetics*, Edinburgh University Press.
- 福嶋敦隆, フアン・ロメロ・ディアス (2021) 『詳説スペイン語文法』白水社.
- Hara, M. (1973) *Semivocales y neutralización*, Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- 原 誠 (1979) 『スペイン語入門』岩波書店.
- Hualde, J. I. (2005) *The Sounds of Spanish*, Cambridge University Press.
- International Phonetic Association (1978) The International Phonetic Alphabet (revised to 1979), *Journal of the International Phonetic Association*, 8.
- International Phonetic Association (2020) The International Phonetic Alphabet (revised to 2020), <https://www.internationalphoneticassociation.org/content/full-ipa-chart>

- Kimura, T. (2018), “Evaluación subjetiva de la pronunciación con “acento japonés” segmental por hablantes de español L1”, 『言語教育研究』, 清泉女子大学言語教育研究所, 10, pp. 17-30.
- Kimura, T., Arai, T. (2019), “Categorical Perception of Spanish /y/ by Native Speakers of Japanese and Subjective Evaluation of Various Realizations of /y/ by Native Speakers of Spanish”, 『音声研究』, 日本音声学会, 23, pp. 119-129.
- Ladefoged, P. (1964) *A Phonetic Study of West African Languages*, Cambridge University Press.
- Ladefoged, P. (1971) *Preliminaries to Linguistic Phonetics*, Chicago University Press.
- Martinet, A. (1955, 2005) *Économie des changements phonétiques*, Maisonneuve & Larose.
- Martinet, A. (1956) *La description phonologique*, Librairie Droz.
- Martínez Celdrán, E. (1984) *Fonética*, Teide.
- Martínez-Celdrán, E., Fernández-Planas, A. M., Carrera-Sabaté, J. (2003) “Illustrations of the IPA: Castilian Spanish”, *Journal of the International Phonetic Association*, 33, pp. 255-259.
- Martínez-Celdrán, E. (2008) “Some Chimeras of Traditional Spanish Phonetics”, L. Colantoni & J. Steele, *Selected Proceedings of the 3rd Conference on Laboratory Approaches to Spanish Phonology*, Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project, pp. 32-46.
- Martínez Celdrán, E., Fernández Planas, A. M. (2013) *Manual de fonética española*, 2.^a ed., Ariel.
- Martínez Celdrán, E. (2014) “Naturaleza fonética de la consonante ‘ye’ en español”, ponencia presentada en el VI Congreso Internacional de Fonética Experimental, Universitat de València.
- Navarro Tomás, T. (1918, 1990) *Manual de pronunciación española*, Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- Quilis, A. (1981) *Fonética acústica de la lengua española*, Gredos.
- Quilis, A. (1993) *Tratado de fonología y fonética españolas*, Gredos.
- Real Academia Española (1973) *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Espasa.
- Real Academia Española, Asociación de Academias de la Lengua Española (2011) *Nueva gramática de la lengua española: Fonética y fonología*, Espasa.
- 寺崎英樹 (2017) 『発音・文字 (スペイン語文法シリーズ 1)』 大学書林.